

イベント名	「言語文化教育」とAIのかかわりを問う		
実施委員会	研究集会委員会	開催場所	京都教育大学 藤森学舎
開催日時	2024/12/14 10:30-16:00 2024/12/15 10:00-13:00	参加人数	24名
参加資格	会員・非会員	参加費	会員 2000円, 非会員 4000円
イベント概要(案内文など)			
<p>ALCEでは、ことばと文化の教育とは何か、ことばと文化の教育を研究するとはどういうことかを議論する場を提供しています。大量のテキストデータを機械に読み込ませ、その中から人間の言語がもっているパターンを見つけてことばを紡いでいる生成AIが我々の生活の中に浸透してきたことで、我々教育関係者にも、大きな影響が生まれています。そこで、ことば・文化・教育・社会にかかわる「わたしたちの教育」は、AIをどう利用し、向き合っていくのでしょうか。</p> <p>プレ企画(8月25日開催)では、茨城大学の笹井一人さんに、AIと人間の異なり、AIと教育の関わりについて話題提供をしていただきました。そして、AI推奨、AI受け入れ、AIに危機感を覚えるなど、「わたしたちの教育」にAIが+になりえたり、-になりえたりする場面を考え、AIと多様な向き合い方があることを、参加者の関わっている教育の実例を共有しながら議論しました。この議論を通して改めて浮かび上がってきた「人間にしかできない教育とは何なのか」、「私たち人間は教育とどのように向き合っていくのか」、「わたしたちの教育」とAI(とその特性)はどのように関わっていくのか」などの問いを、AIを使うことの是非にとどまらず、そもそもの「わたしたちの教育」とAIのかかわりを問うてみるのが重要だと考えました。</p> <p>そこで2024年度の研究集会では、プレ企画をさらに進め「言語文化教育」とAIのかかわりを問うために、“しかけ”として、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 話題提供に基づくパネルディスカッション</li> <li>2) 「わたしたちの教育」とAIのかかわりを通じた参加者同士の交流</li> <li>3) 口頭発表 を柱とする場をつくります。</li> </ol>			
活動報告			
<p><b>【企画全体の趣旨について】</b></p> <p>現代社会では、大量のテキストデータを解析し、言語パターンを生成するAIが生活に浸透しつつあり、教育関係者にも大きな影響を与えています。このような状況の中で、言語文化教育はAIをどのように活用し、向き合うべきかが問われています。</p> <p>2024年8月25日に開催されたプレ企画では、茨城大学の笹井一人氏を招き、AIと人間の相違点や教育との関係性についての話題提供が行われました。議論では、「AIが教育にとってどのようなプラスやマイナスをもたらすのか」を具体的な教育事例を通じて共有し、AIとの多様な向き合い方が議論されました。この議論を通じて浮かび上がったのは、「人間にしかできない言語文化教育とは何か」、「私たちはどのように言語文化教育と向き合うべきか」、そして「言語文化教育とAIはどのように関わるべきか」という問いです。この問いをさらに掘り下げるため、本企画のテーマを設定しました。</p> <p>本研究集会では、学際的な視点からこれらのテーマを考察する場を設けました。シンポジウム</p>			

では3名の登壇者が、言語文化教育、AI研究、教育学の各分野の立場から話題提供を行いました。他分野の知見を交えつつ、議論を通じて見解の共通点や差異を探る対話の場となりました。また、2日間を通じて行われた5本の自由研究発表を基に、言語文化教育の多様な側面について議論が深められました。

#### 【自由研究発表】

1日目から2日目にかけて、5本の自由研究発表が行われました。

伴野崇生(慶應義塾大学)「搵返享受廣東話嘅我:ChatGPT-4oの音声会話機能で遊び、遊び、歌う<私>のオートエスノグラフィー」

奈良夕里枝(都留文科大学)「日本語学習者の作文添削におけるAIの精度と特性を考える」

吉井雄樹(関西学院大学大学院)「日本語学習者とは何歳か—「年齢」から日本語教科書を批判的に読むために—」

古屋憲章(山梨学院大学)「日本語教師の社会的役割を考える—日本語を教える人から共生社会の実現に寄与する専門家へ—」

神山英子(都留文科大学)「生成AIを使用した介護の日本語教育の可能性」

各発表における質疑応答では、「言語文化教育においてAIを使う目的は何か」、「AIを用いることで何を狙っているのか」、「授業では具体的にどのようなAIをいかに使っているのか」、「発表者自身はAIとどのようなかわりを持っている、または持とうとしているのか」、「AIと教育がかかわることで、教師の役割はどのように変わるのか」という点に議論が及びました。

#### 【シンポジウム】

1日目の午後には、「言語文化教育」とAIのかかわりを問う」というテーマでシンポジウムを実施しました。3名の登壇者と提供された話題は以下の通りです。

笹井一人(茨木大学)「AI研究者の立場から」

「AIと人間を対立的に捉えることで人間らしさを求める」という図式から、「AIと人間を共生的に捉えるなかで生命らしさを考える」という図式への転換を提案しました。

大久保紀一郎(京都教育大学)「教育学研究者の立場から」

いずれ学校を卒業する子どもが、教師がいなくなっても学び続けられる自立した学習者となるための公教育を目指す上で、多様性を重視した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の手段として生成AIを活用することを提案しました。

小西達也(早稲田大学大学院助手)「言語文化教育学研究者の立場から」

AIを使いたい人とAIを使うのがしんどいと思う人が共に嫌な気持ちをしなない社会を目指すのか、もし目指せるのだとしたら(言語文化)教育分野の実践や研究にはどのようなことができるかを問いかけました。

話題提供後には、参加者が3~4名ほどの小グループに分かれて、話題提供の内容についてグループディスカッションを行いました。グループディスカッションで出た意見や質問は、Padletに入力し、参加者間で共有されました。

また、登壇者3名による鼎談を行いました。鼎談では、まず笹井さんから、デジタル化(手紙からメールへ、電話からチャットへの変化)したにも関わらず、私たちの時間が減っているという不思議な状況が生じており、AIについても、これを導入することで私たちがどうしたいのかを考える必

要があることが話されました。次に、大久保さんからは、「AI を使うか否か」、「AI は効率的なのか非効率的なのか」という対立ではなく、既存のツールと上手く組み合わせることが大切であり、AI が普及した社会に子どもが出ていくことを見通した時、学校・授業でも AI について触れさせる必要があることが話されました。最後に、小西さんからは、AI を教育現場・実践に取り入れることが前提だと話しづらいが、無理に AI を使わなくても大丈夫であるという意見や、私も AI を使うことにしんどさを感じていたという共感の声があると安心するし、歩み寄って考えやすくなるということが話されました。

#### 【クロージングイベント】

クロージングイベントでは、本企画の自由研究発表やシンポジウムを通して提起された論点を踏まえて、グループディスカッションを行いました。主なディスカッションの論点は以下の3つです。

「言語文化教育」とAI のどのようなかわりを問えば良いのか？

「言語文化教育」とAI はどのようにかわれば良いのか？

私(教師・研究者・市民)はAI とどのようにかわるか？

また、グループディスカッション後には、自由研究発表の発表者である5名に、ご自身の発表や2日間の議論を通して、自らとAI のかわりまたは「言語文化教育」とAI のかわりについて、どのようなことを問うたのかについて、お話いただきました。

#### 【本企画の全体の振り返り】

本企画では、多様な自由研究発表やシンポジウムにおける立場を異にする登壇者の話題提供を踏まえて、「言語文化教育とAI のかわり」を論点に議論を深めました。2日間を通して、議論の場面を多く設けたことで、多様な意見が交わされました。議論の焦点となったのは、「言語文化教育が何を指すのかという目標論」、「言語文化教育実践で AI をどのように活用するかという授業論」、そして「AI の活用によって教師の役割はいかに変わり得るかという教師論」でした。生成 AI の教育への活用はまだ緒についたばかりですが、本企画は先駆的・挑戦的な実践を共有しつつ、具体的な授業事例と抽象的な教育論を往還的に考える場として重要な意義を持ちました。